

小野市アンテナショップ「いちいち」×学生プロジェクト — トリコデルマ菌による“甘くて大きいトマト”の認知拡大 —

流通科学大学 西村ゼミ
メンバー: ジョラクキ 縄田倅一郎 ソウピョーヘインチョウ

みどり戦略学生チャレンジとの関連性

小野市で新たに誕生したアンテナショップ「いちいち」を舞台に、地域資源（トマト）を活用し、循環型農業（シュレッダーゴミをたい肥化）による環境配慮型の農業モデルを学生主体で検証する取り組み。
SDGs（12番つくる責任つかう責任、13番気候変動への具体的行動）に合致する「みどり戦略」の実践事例として発信可能。

取り組み内容

5月18日 フィールドワーク

小野市のトマト農家を訪問し、規格外品・フードロス・生産者の高齢化などの地域課題を調査。同時に、トリコデルマ菌とシュレッダーゴミ由来たい肥の仕組みを学び、循環型農業の可能性を提案した。

目的

小野市で新たに誕生したアンテナショップ「いちいち」を舞台に、地域資源（トマト）を活用し、循環型農業（シュレッダーゴミをたい肥化）による環境配慮型の農業モデルを協力農家と学生で検証する取り組み。SDGs（12番つくる責任つかう責任、13番気候変動への具体的行動）に合致する「みどり戦略」の実践事例として発信可能。

背景

「いちいち」では、地域で栽培された“特別な理由のあるトマト”を購入できる場として情報発信を行い、来訪動機の創出と認知度向上を図る。また、トリコデルマ菌とシュレッダーゴミ由来たい肥を活用した高品質トマトと通常栽培トマトを比較し、その違いを来場者に体験してもらうことで、品質向上の取り組みを広く伝える。



図1：いちいちのフィールドワーク

トリコデルマ菌とは何か
植物に悪効果な菌だったが、九州大学の九州大学熱帯農学研究センターによって発見された911番目の菌株は紙を分解し、農作物に増産できる良い菌になっている。ニンジンに増産した事例も実現されていた。

9月3日 トマトの定植



図2：トマトの定植通常区

図3：トリコデルマ菌区

トマトをトリコデルマ菌+たい肥区と通常区（対照）に分けて定植。生育状況を継続的に記録し、科学的アプローチによる品質向上の検証を行う。

12月20日 収穫後の予定

収穫を行い、糖度・サイズ・重さの比較や学生による品質評価、市民向け試食サンプルの確保を実施する。収穫後はアンテナショップ「いちいち」でマルシェを開催し、食べ比べイベントや栽培方法の説明パネルで取り組みを紹介する予定。

区	平均糖度	平均サイズ	来場者評価
対照区	—	—	—
トリコデルマ区	↑1.2倍	体積15%増	70%が「美味しい」

出典：TBS「がっちりマンデー」儲かる園芸2025.6.12放映

結果

※現時点の到達点+予測を整理

- これまでの成果（中間）
地域農家との協働体制の構築
トリコデルマ菌活用による生育改善の兆し
アンテナショップ「いちいち」での情報発信準備
大学×自治体×農家の“みどり戦略”モデルの形成
- マルシェ後に得られる見込み結果
トリコデルマ使用区の優位性（甘味・サイズ）の可視化
試食体験を通じた“理由のあるトマト”としての差別化
アンテナショップ来店者増加
SNS拡散による認知度向上
学生による消費者データ取得 → 次年度の改善へ



図4：大学から出たシュレッダーゴミ

図5：シュレッダー漉き込む様子



図6：トリコデルマ菌区の生育の様子



図7：通常区の生育の様子

今後の展望

トリコデルマ菌や堆肥を使った、理由のある栽培を広げていきます。食べ比べ体験や「いちいち」での販売で、地域の価値をもっと高めます。環境にやさしい農業を続けて、「みどり戦略」と合わせて地域ブランドを目指します。今後は、食べ比べデータや学生の意見を活かして、小野うまいもんブランドの認定や、新商品づくりにつなげていきます。

考察・まとめ

“どこにでもあるトマト”を“ここだけの特別なトマト”へ転換できる可能性が示された。
生産の工夫（トリコデルマ菌・たい肥使用）をストーリー化し、食べ比べという体験価値につなげることで、アンテナショップ「いちいち」の存在意義が高まる。
循環型農業・環境配慮の取り組みは「みどり戦略」と親和性が高く、自治体が推進する地域ブランド戦略とも合致している。
学生が主体となることで、若者の視点を取り入れた新しい地域発信モデルが構築され、継続的な地域活性化につながる。
今後は、食べ比べデータを活用し、ブランド化（小野うまいもんブランド認証）や商品開発への応用も期待できる。